大和の文化遺産を学ぶ⑦－杣之内火葬墓の被葬者は誰か？

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

2019年にスタートした共同研究「大学キャンパスと文化遺産」は、コロナ禍に見舞われた2020年度も、おかげさまで活動を進めることができた。今年度のテーマは、「天理大学杣之内キャンパス周辺の文化遺産と歴史的環境を活かした地域づくり」というもので、今後、「なら歴史芸術文化村」（2022年春開設予定）の整備に伴って大きな変貌が予想される杣之内地区について、点在する文化遺産や恵まれた歴史的環境の価値を再認識するとともに、それを活用した持続可能な地域づくりの方向性を見いだすことを目的とした。とはいえ、春学期は、オンライン授業への対応に追われるなどで研究に着手できず、秋学期になり、ようやく定例の研究会を数回にわたって開催することができた。そのなかで私がとくに関心を持ったのは、杣之内火葬墓に関する日野宏氏（附属天理参考館）の報告だった。

杣之内火葬墓については、本連載でも取り上げたことがあり（2020年11月号）、昭和56年（1981年）、親里競技場の建設に際して発掘調査が行われ、唐代に愛好された海獣葡萄鏡の優品が出土したこと、奈良時代後期の高級官人・石上宅嗣（やかつぐ）卿を被葬者とする説があることなどを紹介した。しかし、当時、発掘調査に携わった日野氏によると、異なる可能性が考えられるという。問題の火葬墓は、園原町から幾坂池に向けて伸びる丘陵の尾根筋を少し外れた南斜面にあり、直径10.36m、深さ1.5mの半円形の掘り込みを行い、さらにその中央に1辺3.2m、深さ0.6mの方形の掘り込みを行っている。掘り込みは、砂質、粘質の土を5～8cmの厚さで交互に重ねる版築の方法で埋め戻されている。版築の完了後、1.3×1.4mの方形の墓壙が掘り込まれ、コウヤマキを刳（く）り抜いた木櫃（長さ67.9cm，幅約45cm）が納められた。木櫃からは火葬骨に交じって銀製の釵子が出土した。木櫃の脇から出土した海獣葡萄鏡は、製作年代が8世紀前半～中葉と推定された。

日野氏によると、火葬墓の築造年代については、『続日本紀』養老5年（721年）10月13日、元明上皇が自らの葬送について、薄葬を徹底し、火葬したのちは他所に改めることを禁じた詔が参考になる。神亀元年（724年）に没した小治田安萬侶の火葬墓（奈良市都祁甲岡町）は、3.5m程の方形の穴で火葬を行い、元明上皇の詔に従って、そのまま埋め戻した上に盛り土を行い、遺骨を納めた木櫃（蔵骨器）と墓誌を埋納している。これに対して、杣之内火葬墓は直径10.36mと規模が大きく、高松塚古墳と同様の堅固な版築が採用されていることから、元明上皇の詔以前の造墓とみられるというのだ。よって、火葬墓の被葬者は、奈良時代の後半に活躍した石上宅嗣卿ではなく、養老元年（717年）に没した、その祖父、石上麻呂だった可能性がある。石上麻呂といえば当時の左大臣。右大臣・藤原不比等と並んで、当時の政権を支えたビッグネームだ。

そこで、年度末も押し迫った3月29日、定例研究会（現地見学会）を開催し、現状を確認する運びとなった。杣之内火葬墓は、親里競技場の敷地奥に保存されているのだが、見学するためには管財課の許可が必要だ。見学の当日は、共同研究の関係者のみならず、2020年春に開設予定の「なら歴史芸術文化村」の担当者・学芸員を含め、10数名の参加者が、附属天理参考館の玄関前に集合した。まず、天理市がリニューアルした西山古墳の説明板を確認し、地蔵堂、都祁山口神社で区長さんの説明を受けたあと、国道を渡り、「なら歴史芸術文化村」の工事現場を脇目に南に向かう。沿道の桜はすでに満開で、幾坂池の一本桜が少し離れて見える。西乗鞍古墳の手前の道路を東に折れると、天理市が整備した観光駐車場が右側にあり、さらに東に進んで、親里競技場の敷地内に入る。奥に進んで、普段は施錠されている通路の入り口を抜けて、グラウンドの背後に回り込んだところにあるのが、杣之内火葬墓だ。

写真1　杣之内火葬墓の現地見学

火葬墓は発掘調査終了後に整備工事が行われ、墳丘が復元されている。火葬墓から南側の眺望は抜群で、グラウンドの向こう側に東乗鞍古墳、西乗鞍古墳が見え、さらにその背後に二上山と葛城の山並みがかすんで見える。墳丘上に設置された説明板には、「文化財としての重要性に鑑み、この地を永久に保存し、活用することを念ずる　天理教表統領　清水國雄」と記されている。文化財としての価値が高いのみならず、保存状態も素晴らしいことがわかる。競技場の建設に際して、文化財の保存・整備を行った当時の関係者の努力と判断に敬意を表したい。現状では未指定だが、いずれ、国や県レベルの史跡に指定されて然るべきであろう。指定の際には、火葬墓ではやや生々しい感じがするので、名称を「杣之内古墓」などと変更してはどうだろうか。

一つ気がつくのは、現状では、活用に関して少し残念な状況になっていることだ。現地を見学するためには競技場の敷地内を通っていくしかないが、整備工事中の「なら歴史芸術文化村」は、杣之内町火葬墓のすぐ北側の丘陵にあり、今後、互いに行き来ができるような散策路の設置を検討すべきだろう。遺憾ながら、スポーツ関連施設によって分断が生じてしまっているのだ。杣之内周辺地域については、「スポーツの町・天理」、「歴史と文化かおる共生都市・天理」（天理市第6次総合計画）が調和した持続可能な地域づくりが今後の課題であり、そのためには杣之内町、天理市、奈良県、学校法人天理大学、天理教などが認識を共有し、高いレベルで調整を行う必要があることが、杣之内火葬墓を一つの具体例として浮かび上がってくる。

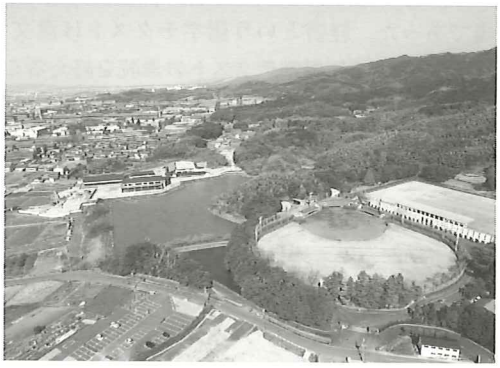

写真2　上空から見た杣之内周辺地区
（競技場の奥が杣之内火葬墓）